

高齢者が」と忘れ」しても、「またか」で笑っておれる。が、若いひとの場合は、相当深刻な話になる。

48歳のK子さん。この頃、忘れっぽくなったと言う。人や物の名前が、すぐに出てこない。しなければならぬことを、すっぽかした。鍋を焦がしそうになったこともある。で、「ひょっとして認知症では？」と悩んでいた。

確かに、K子さんには認知障害があるようだ。でも、周りのひとは、気付いていない。そして、もの忘れの検査でも、頭のMRI（磁気共鳴画像装置）の検査でも異常は見つからないのである。認知機能の低下を自覚している。だが、客観的にはそのことを証明できないのだ。この状態は、主観的認知障害(SCI)と呼ばれている。

高齢者に多くみられるアルツハイマー型認知症の発症初期には、SCIと同じく、もの忘れを自覚しているひが多いう。う。う。う。若いひとのSCIも、認知症の前駆症状と言えないのだろうか？原因とされるアミロイドβの沈着は、認知症発症の20〜30年前から始まるというからだ。でも、PET（陽電子放射断層撮影）や特殊

なMRI検査を行った検討では、否定的な結果が報告されている。若いひとと高齢者のSCIは違うかもしれない。

実は、SCIは認知症と関係ない原因で起きることもある。スマホの使い過ぎは、記憶障害や注意力低下を起すと言われる。ストレスや不安は、主観的は自覚症状を増悪させるだろう。また、認知障害は、うつ病などとも関係しているのだ。

結局は、KさんのSCIの原因は分からず、経過をみることになった。でも、「今は認知症ではない」と聞いただけで、彼女に笑顔がもどった。ひとりで悩んでいた。でも、不安は募るばかりだ。頼りないようだが、医者に相談したほうがましかも。

（石黒修三 しいへろクリニック・脳神経

外科専門医…3/21北國新聞掲載）